

## 「携帯電話」

学年だよりでもお伝えしましたが、携帯電話の使い方に問題が出てきています。電車内でゲームやメールをしているというような話はあったのですが、私はこれまでこのようなことは保護者が指導すべきことと考えていました。学校側の考え方を十分理解している保護者が子どもに携帯電話を持たせているのですから、その使用については子どもへの適切な声かけが行われていると思っていました。しかし、実態はそうではないようで、学校内、通学路、電車内、駅などで緊急連絡とはほど遠いような使い方がされていることに大変驚いています。

桐光学園では小、中、高で原則として学校に持ってきてはいけない（中高はかなり厳しい）ことになっている携帯電話ですが、小学校では登下校時の安全確保のためにどうしても持たせたいという場合にのみ許可しています。これはあくまでも例外的な措置であることをまず確認しておきたいと思います。そして、小学校としても今後子どもが誤った使い方をしていることが分かった場合には、個別に学校に持ってくることを禁止しますので、携帯電話を持たせている保護者は改めてその使い方をご指導ください。

## 「学校に行きたくないな・・・」

「今日は学校に行きたくないな」と思ったことは誰もが一度くらいはあるのではないのでしょうか。ほとんどの場合は、学校に来てしまえば不安だった気持ちも無くなり楽しく生活できるのですが、なかなか学校への一歩が踏み出せない子がいるのも確かです。不安な気持ちのままに前に進むことは勇気の要ることですし、もしもその不安な気持ちがなくならないまま一日の生活を送ることになれば、さらに翌日の一歩が困難なものになることもあるでしょう。

学校、家庭で一見元気に見える子どもたちの中には、教員、保護者の期待に応えようと一生懸命な子もいます。しかし、何らかの障害にぶつかって自分の思い通りにならないことがあると、意外にもろく傷つき、それを乗り越えようとする意欲を持たない子どもが最近多くなっているのではないのでしょうか。

6年間の小学校生活の間には様々な問題に直面することがあります。それだけに、困難なことに出会ったときに、それにどう立ち向かっていくかを自分なりに考えていくことができるような子どもたちに育ててほしいと願っています。

そういう面で、最近大きな関心を持たれている「いじめ」と同様に「不登校」ということも、大変気になることの一つです。「学校に行きたくても行けない」のが「不登校」というものですが、その原因が子どもの心にあるのか体にあるのかは特に小さい頃の子どもにはよく分かりませんし、子ども自身に聞いても「分からない」という答えが返ってくることも多いです。また、その原因が学校、家庭のどちらにもあるのかも分かりにくい場合があります。学校に原因がある場合は、勉強がわからない、友だち関係で悩んでいる、先生が怖いなどが考えられます。また、家庭に原因がある場合は両親が喧嘩などを行っているのを見て、自分がいないとどうなってしまうのだろう、というような不安な気持ちになる子もいるようです。子どもたちが小さな体で、様々な困難に立ち向かい、自分の心の安定を保ちながら一生懸命に学校に来てくれることを本当にうれしく思います。私たちは、子どもが自分で困難に立ち向かおうとする気持ちを育て、尊重しながらできる限りの応援をしなければなりません。

## 「子どもの自立」

子どもの自立を願う親の気持ちはよく分かります。自分のことが何でもできるというのはまさに親が理想とする子どもの姿であるかもしれません。しかし、そのように見える子どもの姿が実はその子どもの本当の姿であるかどうかを大人は子どもに寄り添って見極めていくことが必要です。

上で取り上げた「不登校」になりそうな子どもは多くは、その兆候が見られるようになるまでは「比較的手がかからないよい子」であった場合が多いように感じるのは私だけではないと思います。親と教師が子どもに対して期待する姿を示していくことはよいことですが、それを子どもが「こうでなければならない」と強く受け取るようになると、自分の様々な欲求を抑えて日々の生活を送ることになってしまうことがあります。また、そうすることで周りの大人たちが喜んでくれるためにその傾向はさらに強くなります。

以前高学年で担任したある男の子が私に、「先生、僕は本当は先生たちが思っているほどいい子ではないんだよ。低学年の頃から先生たちからいろいろと期待されてきたけれど、本当につらかったんだ」ということ言ったことがありました。その後の彼は、特に大きな変化もなく元気に過ごしていましたが、それまでずっと思っていたことを教員である私に伝えたことで少し気が楽になったようでした。

「自立」という言葉が一人歩きすることなく、「子どもが自分でできること」を少しずつ増やしていこうという気持ちになることで、子どももまわりの大人も救われていくのではないかと思うことがあります。